

# 戴曼公獨立禪師記念碑

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**吉**川広嘉公像から歩いて十分ほどの紅葉谷公園は、名前のとおりモミジが多く茂り、その新緑の美しさは、現実とは思えないほど目に鮮やかに、眩しく迫ってきた。それら若葉の放つ光に包まれて、錦帯橋創建三〇〇年を記念して建立された独立禪師の記念碑は、自ら輝いているように見えた。

錦帯橋が架かる錦川は、山口県最大の河であり、山また山を縫うように流れているため、美しい名前とは裏腹に、大雨になれば水が溢れて河口付近の岩国を濁流が襲った。

岩国を治める吉川家は、錦川右岸の横山に治所をおく一方で、城下町は左岸の錦見村に広がっていたため、両所をむすぶ橋は必要不可欠であったが、河幅約二〇〇メートルの暴れ川はやすやすと架橋を許してはくれなかった。明暦三年（一六五七）に二代領主の吉川広正が架けた横山橋も、わずか二年で流されてしまい、その後は渡船をもって河をわたる不便を君臣ともに強いられており、いつしか流されない橋を架けることは、吉川家の悲願となっていた。

横山橋が流された後、架橋の悲願は三代領主の吉川広嘉に引き継がれた。広嘉は英邁な領主であったため、架橋の苦心に努力をおしまなかったと伝えられる。たとえば、江戸参府の帰りに回り道して、甲

斐の猿橋を視察したという。また、生来病弱だったため、たびたび京都へ療養におもむいていたが、後に錦帯橋を手がける御作事組の児玉九郎右衛門を御供に選ぶこともあった。御作事組とは、大工を担当する役職のことで、わざわざ彼を道連れにしたのは、当時の知識があつまる京都において、橋梁学の見聞を広めさせるためだと考えられている。

しかし、河幅二〇〇メートルの暴れ川は如何ともしがたかった。橋脚を造れば流されてしまい、橋脚を用いない猿橋のような刎橋形式にしてもスパンに限度があり、とても錦川を渡すことはできなかった。そして広嘉自身の病状も療養の効果もなく、外出も出来ない状態になっていた。

そんなおり、広嘉の治療のために、長崎から黄檗宗の独立禪師は招かれた。独立は中国からの帰化人で医学に精通していた。寛文四年（一六六四）四月のある日、独立は広嘉と歓談し、故郷である杭州の名勝・西湖について記された『西湖遊覧志』を話題にしたことから、広嘉の望みで長崎から取り寄せることとなった。

そして同年六月、独立の前で『西湖遊覧志』を手にとった広嘉は、一枚の絵図にくぎ付けとなり、次の瞬間、パーンと机をたたいて「われ会心の奇処を

得たり！」と叫んだという。そこには西湖に並ぶ小島の一つ一つが、アーチ橋で結ばれている様子が描かれていた。河幅が広ければ、川に島を築けばいい。錦帯橋が創案された瞬間だった。

この時の様子を、独立は広嘉がつけさせた『西湖遊覧志』の写本の序文に記しているが、錦帯橋との関連には触れておらず、なぜ広嘉が大喜びしたのか、わかっていなかったのかもしれない。（つづく）



戴曼公獨立禪師記念碑

【交通】吉川広嘉公像より徒歩約10分  
紅葉谷公園内の六角亭付近

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。